

第2回大会からは、その憧れの平和台球場、目にも鮮やかな人工芝の上で甲子園球児のように行進を行い、開会式に参加するという晴れ舞台が、子ども達の前に出現した。子どもたちの健全育成を願う、それぞれの地域の父母の願いが、ソフトボールを通じてひとつの若木を大地に刺し、陽の光と水を得て育ち始めたのだ。

ただ、真夏の炎天のもと開会式を行い、各会場に移動するスケジュールは子どもたちにとってはややハードだった。こうした点を考慮し第6回大会（昭和62年）からは開会式が大会前の夜間に行われるようになり、カクテル光線の中での行進となった。

参加チームは年々数を増し、第7回大会ではついに100チームを突破。記念すべきこの年、福岡の少年少女球児にとって大きな出来事があった。そう、この秋に大阪から球団が移転し福岡ダイエーホークスが誕生したのだ。子どもたちへの何よりのプレゼントだった。



また、早良区では昭和58年から、他の区でも翌年から、各区の親善大会が開催されるようになり、リーグを超えた交流と対戦が行われた。大会も陣容を増し、平成2年には参加チーム数が128に達する。小学生ソフトボールとしては全国でも屈指の参加チーム数・大会となった。

平成4年の11回大会からは雁の巣レクリエーションセンターが試合会場となり「夏の雁の巣」が各チームの目標となる。この11回大会から13回大会にかけ、「上野の413球」で日本中に感動を呼んだ北京オリンピック女子ソフトボール金メダリスト、上野由岐子選手も出場している。

そして平成5（1993）年、ホークスの新たな本拠地、日本初の開閉式屋根を持つ福岡ドームが誕生する。「この日本一の球場で、子どもたちを行進させてあげたい」。連盟の関係者に、またひとつ大きな夢と目標ができた。この前年から、ほとんどの小学校で初めて週5日制（第2土曜日休み）が導入され、土曜日も学校が休みという時代の幕開けとなる（平成7年度からは第4土曜日も、そして平成14年度には完全週5日制へと移行）。

この年はまた、Jリーグが発足した年としても記憶される。サッカーへの人気が高まった。幅広い年代を対象とするスポーツクラブを通じた地域の振興、地域に支えられたクラブの運営という理念は、小学生ソフトボールの指導者たちにも大きな刺激と影響を与えずにはいられなかった。

ドームでの開会式が実現するのは平成10年の17回大会からである。



那珂イーグルス優勝
少年ソフトボール連盟大会

福岡市少年ソフトボール連盟（渡部雅会長）主催の第1回博多区支部大会が、15日（土）午前8時30分から那珂小グラウンドで行われた。8月26日の試合が雨天順延されたもの。校区あるいは町内単位で編成された10チームが参加。試合に先立ち開会式で各チームを紹介し、第1回大会らしく関係各社から優勝旗、トロフィー、たて、メダルが贈呈された。城戸義三副審判部長による開会宣言につづき「ソフトボールを通して健康で明るい子に育ってください」と渡部会長のあいさつ。来賓あいさつ、祝電披露のあと高瀬重信審判部長が選手宣誓誓詞を読み、試合はトーナメント形式で戦った。この大会で優勝した那珂イーグルス3位は板付北クラブ。優勝戦は2対1で那珂イーグルスが第1回の栄冠を奪った。

山本常信支部長の話 第1回大会らしくいい試合ばかりでした。これからはソフトボールが盛んになればいいですね。

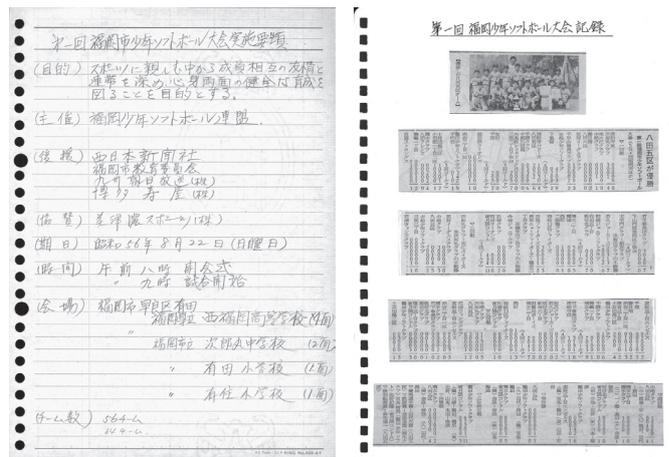
から競技上の注意がなされ板付北クラブの小園哲也君が選手宣誓誓詞を読み、試合はトーナメント形式で戦った。この大会で優勝した那珂イーグルス3位は板付北クラブ。優勝戦は2対1で那珂イーグルスが第1回の栄冠を奪った。

「ソフトボールを通して健康で明るい子に育ってください」と渡部会長のあいさつ。来賓あいさつ、祝電披露のあと高瀬重信審判部長が選手宣誓誓詞を読み、試合はトーナメント形式で戦った。この大会で優勝した那珂イーグルス3位は板付北クラブ。優勝戦は2対1で那珂イーグルスが第1回の栄冠を奪った。

大会発足当時を知る連盟の関係者は当時をこう振り返る「パソコンや電子メールはもちろん、携帯電話もワープロもなくFAXも一般的ではない。選手名簿は手書き、連絡は電話や郵便で取り合い、今にして思えば大変な時代でした。当時はそれが当たり前でしたけれど」

しかし、何よりも彼らを支えたのは次代を担う子ども達の純粹な心。この子たちに、夢を、希望を、未来へ携える思い出を、との思いは、30年を経た今も色あせることは無い。

これだけの規模の大会となると、各方面の支えも必要となる。主催者テレビ西日本・西日本新聞社を始め、協賛各社、さらに福岡市ソフトボール協会審判団、福岡市、福岡市教育委員会、?福岡市体育協会など多くの協力によって大会は続いてきた。これらに感謝するとともに、歴代大会関係者の努力への敬意を忘れてはならない。



平成7(1995)年、野茂英雄が敢然とした決意とともに単身海を渡り、メジャーデビューを果たした。子どもたちの夢は、「いつか甲子園の土を」の先の「いつかプロ野球選手へ」、そして「いつかメジャーへ」へと世界へ羽ばたくようになった。

どんな偉大な選手にも、最初の一步がある。親や兄弟とのキャッチボールであり、初めて袖を通したユニフォーム。小学生というステージで、いつまでも色あせない輝きを発揮する舞台。30年前のパイオニアが刺した一本の若木は、夏の日差しを浴び、今、青々とした葉を茂らせる壮年の木へと成長した。

第1回大会当時の選手は今、37歳から42歳と、まさに社会を担う中軸。刻まれた歴史は受け継がれ、明日へと手渡されていく。OBには甲子園に出場した球児はもちろん、日本リーグで活躍するソフトボール選手、プロ野球選手、そして上野選手らオリンピックのメダリストもいる。



発足時から大会役員として参加し、今も清道クラブジュニアの監督を務める山本常信氏は「現在では自分の孫の世代が選手ですが、本質的な部分は変わらないですね。気風や環境などの変化はあるでしょうが、懸命にプレーする姿や親が子を応援する気持ちに違いは無いのではないのでしょうか」と語る。少年から青年へと成長する忘れられない一步として、どの選手にも、友人とともに歩んだあの夏の日の一步が記憶されていくに違いない。彼らの頭上に輝く「栄冠」を見た親御さんたちとともに。そしてまた、その子どもたちへと。

